子どもに聞かせたいこと 見せたいこと

安藤 美紀夫

子どもとテレビの問題は、テレビが普及しはじめのころの、いわゆるテレビ・ジプシーの問題を含めて、ずいぶんさまざまな話題を教育の現場や家庭の中に提供してきた。

そして、また、電気紙芝居などと悪口をたたかれながら、テレビが、いつのまにか私たちの生活のかなりの程度に主要な部分にはいりこんできた。その推移を見れば、それもまた当然のことといえる。

しかし、それにもかかわらず、この子どもとテレビの問題は、一般には、ごく浅いところでしかとらえられてこなかったことも、事実である。

「テレビばっかり見てないで……」

ということばを、日本の子どもたちはそれこそ耳にたこができるほど聞かされてきた。そして、それに続くことばは、ほとんど常に、「少しは本でも読んだら、どう」または、「ちっとは勉強しなさいよ」である。

ここにあるのは、テレビは勉強にとって有害なもの、という意識である。だから、同じテレビでも、幼稚園や学校で見せてくれる視聴覚教材としてのテレビ番組は無条件に肯定する、という結果になる。それは勉強の足しになると思うからである。

もちろん、テレビ批判にはそうした種類のものだけではなく、番組への批判もあれば、思想動員を警戒する側面からの批判もあるし、それはそれとして大きな意味を持つことはいうまでもない。

しかし、その場合にもなお、問題は残る。仮に、ここ

に小鳥の生態を写した番組があるとしよう。そういう番組が子どもに与える影響について、どう考えるのかという問題である。子どもに、科学的な知識を与えてくれるから、そういう番組はいいではないか、といういい方もできる。

だが、と、私はそこでもなお首をひねらざるを得ないのである。なるほど、画面には、その小鳥の巣や、小鳥の飛ぶようすが大写しにされ、視聴者はそれを見て、そういうものかと納得はするだろう。しかし、そのことによって、ほんとうに「科学的な知識」を得たことになるだろうか。

一度でも、双眼鏡を持って森の小鳥を追った経験のある者なら、まず第一に感じることは、つきあいきれないほどの小鳥の動きの速さであろう。これはべつに小鳥だけに限ったものではない。私が北海道で見かけた、しまりすの場合もそうであった。

要するに、天敵の多い地域の小動物にとって、「速さ」は、生きていくための最も重要な要件の一つなのである。ところが、テレビのカメラはその「速さ」を見事に消し去ってくれる。さて、その後に残る「科学的な知識」とは、いったい何なのだろうか。

私たち人間は、自分の目で見たことは、確かであり、間違いのないことだと、思いがちである。人間の知識の六十五パーセントは視覚によって得られる、といった広告心理学の学者もいるほどである。だとすれば、テレビを見たことによって、子どもが小鳥を知ったとかんちがいすることは十分にあり得ることであり、そこにテレビの魔力があるわけである。

もちろん、私は、そのことによって視聴覚教育を全面的に否定するつもりは、毛頭ないけれども、その前に、私たちが子どもにしてやらなければならないことは、可能な限りにおいて、機械をとおさない本物の声を聞かせ、レンズをとおさない本物を見せてやるということである。その土台の上に立ってこそ、視聴覚教育そのものも有効な働きをするだろうと思うのである。

（日本女子大学）